

旧約聖書のヨナ書は、イエス様の姿を先取りして私たちに伝えています。この書の主題は、人間の正義感では理解できないほど、豊かな神様の憐れみです。ヨナ書は、正義と愛を一つとする神様の物語です。

あらすじ

ヨナはニネベの町へ行って叫べと命じられます。「ニネベの悪は私の前に届いている。」しかし彼は逆らって反対方向のタルシシュへ向かって船に乗ります。

すると海が大荒れになりました。ただ事ではない嵐に人々はヨナに詰め寄ります。「あなたは何をしたのだ？」ヨナは白状して神様の命令から逃げてきたと言います。「私を海に投げ込め、そうすれば嵐はおさまる。」海はますます荒れてどうすることもできません。ついにヨナを掴んで海に投げ入れると、はたして海は静まりました。波がヨナの上を超えて行きました。

さて、海の中にとつともなく長い年月を生きてきた大きな魚がいました。魚がヨナを飲み込んだので助かりました。魚の腹の中でヨナは、神様の救いの素晴らしさを讃えました。「嵐の絶望の中、主なる神様のお名前を叫んだ時、私の命は滅びの穴から救い出された。感謝の声をあげて礼拝し、私の誓った使命を果たそう。救いは主にこそある。」神様に命じられた魚はヨナを陸地に吐き出しました。

神様はもう一度ヨナに命じます。ニネベに行って私の言葉を告げなさい。「あと 40 日でニネベは滅びる」ヨナはこの一言を何度も繰り返して叫びました。

これはニネベの人にとって絶望のメッセージでした。そこで彼らは、悪を離れてひれ伏しました。すると神様は思い直され、ニネベを滅ぼすことをやめられました。滅ぼされなかったニネベにとってはハッピーエンドですが、惨めなのはヨナです。滅ぼされなくては困ると、不機嫌になりました。

聖書をお開き下さい。ヨナ書 4 章 1-11 節です。

1)ヨナの正義感 -4:1 ヨナにとってこのことは大いに不満であり、彼は怒った。

ヨナをダメ預言者と思って読み進めると、神様の言うことを聞かない、言った通りにならないとふてくされる、喜んだり悲しんだりする感情に振り回されるヨナの姿が見えてきます。そこから得られるものは「神に命じられたら従え」という浅はかな教訓でしかありません。しかし、ニネベとはどんな街だったかを知ると、彼が逃げたのは当然だったと言えます。

ニネベはアッシリア帝国の首都でした。中東世界がアッシリアに脅威を感じていた時代です。アッシリアは言葉にできないほど残酷な方法で民族を一人残らず根絶しにする、歴史上最も残忍な国でした。それで当時はアッシリアの滅亡こそが世界平和と考えられていたのです。

ヨナが「あと 40 日でニネベは滅ぼされる」と宣言した時「だから悔い改めなさい」とは続いていません。神様はついにニネベを滅ぼしてくださる、という期待がヨナにはあったのだらうと思います。

ところがニネベの人々は自ら進んで主の前にひれ伏しました。その結果、滅びを免れたとなると、ヨナにとっては世界平和がまたしても脅かされたと思ったことでしょう。事実この時滅ぼされなかったアッシリアは、また残虐国家に戻ってしまい、やがてヨナの祖国・イスラエルに攻め込んで滅亡に陥れ、イスラエル民族を捕まえて連れて行き、奴隷として虐待しました。ヨナの行動や怒りは、人間として当然の正義感から来るうめきでした。

2)正義は神にある -4:9 神はヨナに言われた「お前はトウゴマの木の事で怒るが、それは正しいことか」彼は言った。「もちろんです。怒りのあまり死にたいぐらいです。」

怒り心頭のヨナに、神様は「お前は怒るがそれは正しいことか」と問われます。ここで大事なことは、ヨナは神様に言われたからといって簡単に、「私が間違っていました。短気な私を赦して下さい」などとは言わなかったことです。この怒りは正義感から来る、それを神様はご存じでいてくださると言うのが、見落としてはならない、聖書の語る大切なメッセージです。

「トウゴマの木陰に期待させて、その上で枯らせてしまうなんてあんまりだ」「ニネベが減びないのは怒って当然だ。」というヨナの考えは理に適っています。日照りを防ぐ植物が不可欠で、そのトウゴマが枯れたら大変だと言うことは、トウゴマを植えなかったヨナ以上にトウゴマを生えさせた神様の方がご存じです。また、ニネベの残忍さについて神様は最初から悪だと認めておられました。ニネベが減ぼされるべき極悪非道の町だと言うことは、誰よりも神様をご存じだったのです。

そこで、「怒り」そのものは正当だと解ります。しかし人が自分で考える正義感で他者を裁いたり攻撃したりすることは間違いです。なぜなら正義を通すことができるのは自らが罪を持つ人間ではなく、一点の曇りもない神様ただ一人だからです。その神様は人の正義感では理解不能と思われる正義を貫かれます。人間の正義は裁きに向かいますが、神様の正義は尽きることのない憐れみに向かうのです。

3)怒りを思い直す神 -3:10 神は彼らの業、彼らが悪を離れたことをご覧になり、思い直され、宣告した災いを下すのをやめられた。

絶望のメッセージを聞いたニネベの人たちは、悪を離れ、神様にひれ伏しました。私たちは自分の罪を言い表し、悔い改めることを大切にしています。しかし、悔い改める事が、神様の救いを引き出す条件のように考えていないでしょうか。もしそう考えるなら、いかに真実な悔い改めかが、最も大切な要素になってしまいます。

しかし、聖書が語る力点はそこではありません。いったいニネベの人がどこまで神様を理解し、誠実な悔い改めをしたと言うのでしょうか。「3:9 我々は滅びを免れるかもしれない。」とあるように、彼らはいまいな思いだったことが解ります。また神様はニネベの悔い改めが長くは続かないことを解っていました。

救いにとって大切なことは、私たちの悔い改め以上に、神様の憐れみです。ひれ伏すニネベの人を見て、神様は「3:10 思い直され、宣告した災いを下すのをやめられた」とあります。この思い直すと言う言葉は、悔い改めると言う言葉です。ニネベの人を救うために、なんと神様の方が悔い改められたのです。神様は憐れみのゆえに滅びを思い直さずにはいられない方なのです。人の悔い改め不完全ですが、神様の悔い改めは完全です。覆されることはありません。

4)憐れみ深い神様を知る -4:10,11 「お前はこのトウゴマの木さえ惜しんでいる。それならばどうしてわたしがこの大なる都ニネベを惜しまずにいられるだろうか」

ヨナ書には、滅びるべきものを憐れんでくださる神様の物語が、二つならべて書かれています。最初にヨナ個人の物語、次にニネベの町の物語です。

ヨナは嵐に見舞われた時、私を海に投げ込めと言いました。神様の命令に背いて逃げた自分は滅ぼされて当然だと思っていたのです。しかし魚の腹の中で命拾いした時「息絶えようとするとき 私は主のみ名を唱えた。あなたは命を滅びの穴より引き上げてくださった2:8」と祈りました。神様は滅びるべきものを憐れまれることを個人として体験していたのです。

その神様から「私がどうしてニネベを惜しまずにいられるか」と言われた時、滅びるべきアッシリアを惜しみ、憐れまれる神様の心を、自分の救いとして受け取りなおすことができました。神様は、正義を通すただ一人の方だ。その神様がニネベを憐れまれる。同様に滅びるべき私を滅ぼさないでいてくださった。神様の憐れみは何と遠大なことだろう。神様を知らないアッシリアの残忍が赦されるのでなければ、神様の声を聞いてなお背いた私

が赦されるはずもなかったのだ。

主の祈りにある「我らに罪を犯す者を我らが赦す如く、我らの罪をも赦したまえ」と言う言葉が私の心にいつも、ひっかかります。私にはどうしても赦すことのできない相手があります。その人が救われていると思うと、自分の正義感を振り回し、滅びを願ってしまいます。滅ぼさない神様に怒りをぶつけそうになります。

しかし一方で、私は神様を裏切り、親しい人を陥れ、残酷な仕打ちを続けていた。今でもその残忍さを隠して生きている。それを思うと、自分は赦されるはずもない罪人の頭であると感じます。

主の祈りを祈る時、私の正義感では赦すことのできない人を、私の期待通りに滅ぼすことをせず、憐れみ深く赦す神様だからこそ、罪人の頭である私が赦されることを知るのである。

結) 憐れみには犠牲がある—そこには十二万人以上の、右も左もわきまえぬ人間と無数の家畜がいる。4:11

しかし、ここまで来て皆さんは疑問を感じませんか？神様は滅ぼすと言ったのに、簡単に宣言撤回するような方なのではないでしょうか。なんだかいい加減な方のような印象がないでしょうか。ニネベの悪をうやむやにするのが正義の神様のなさることでしょうか。いいえ。滅びるべきものを憐れんで救うためには、滅びる必要のない者が犠牲になってやる必要があることを忘れてはなりません。

ニネベの人たちのことを神様は「右も左もわきまえぬ人」とおっしゃいました。何をしているのか自分でもわかっていない人を憐れんで赦さずにはいられないとおっしゃっています。同じ言葉を祈った方がいます。それは、イエス・キリストです。ご自身を十字架につけた人々を執り成して「父よ、彼らをお赦し下さい。何をしているのか解らないのです」と叫ばれました。

神様にとって何より大切な一人子・イエス様が犠牲とならなければ、救いはあり得ないのです。

そのイエス様が、救い主である印を見せろと言われた時、与えられるのはヨナの印だけだとおっしゃいました。ヨナが三日三晩魚の腹の中にいたように、ご自身も十字架で死に、三日三晩地の中にいた後、復活される、それが救い主である確かな証拠だとおっしゃったのです。これを裏付けるように、ヨナが魚の腹の中にいた時の祈りを見てみると、海の水に沈む滅びを経験したのにも関わらず、「私は山々の基まで、地の底まで沈み、地は私の上に永久に扉を閉ざす。2:7」とあります。これは水の中で滅びる寸前だったヨナの事ではなく、地に葬られたイエス様の十字架の予告であることが解ります。

背いたヨナを赦すため、ニネベの12万の人を赦すため、それほどでなければ赦されるはずのない私を赦すため、イエス様は、史上最悪の残酷な刑罰、十字架にかかられたのです。

少し大げさな言い方ですが、残酷な国アッシリアを惜しみ、憐れまれた神様でなければヨナは赦されなかった。同様に私たちはこの憐れみによって救い出されるのです。神様の正義を貫き、神様の憐れみがあふれ出す、それはただイエス様の十字架と復活によっけています。十字架と復活によって神様の義と愛は矛盾なく一つとなります。

あり得ないほど大きな救いを与え続けられている私たちは、ヨナの祈りのように、今日、もう一度告白しましょう。—私は感謝の声をあげよう。救いは、主にこそある。2:10

お祈りします。

神様。私はすぐに怒ります。赦したつもりでも、また赦せないとはらわたが煮えくり返ります。私の正義感には人にばかり向かいます。しかしその計りで自分が計られれば、それ以上に罪深いのは私であると認めなければなりません。お父様。罪深い私を憐れんでください。完全な悔い改めのできない私に代わって、あなたが思い直してくださることを感謝します。私を憐れみ義として救い出すために十字架で死に、私を愛するために復活して共に生きてくださる、イエス様のお名前でお祈りします。 アーメン